

大阪外国語大学

南十字星

インドネシア語
同窓会

2006年秋 第3号

発行 大阪外国語大学南十字星会
連絡先 大阪府池田市五月丘2-5-113-402
電話 072-753-1693
Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

統合後も存続発展を

南十字星会関東支部元幹事 磯田 良一 ('55卒 大3)
(咲耶会会長)

卒業後の1959年春に上京。初めて出席した関東支部の懇親会で諸先輩にお会いし、いろいろ話を伺いました。私には大きな刺激になり「よし、自分も商売しよう」と。その時の決意が、今の会社設立につながりました。

在学中は専ら陸上競技部で練習に熱中していました。インドネシア語はあまり勉強しなかったのですが、'67年に支部の幹事に。専攻語のつながりはありがたく、恩師や仲間との親交が随分深まりました。

特に、内藤春三先生とは在学中の時と違った、親密なおつきあいでした。温泉地など各地で催した支部の懇親会にも、都合をつけてよくお顔を見せていただきました。'80年には先生が私財を寄贈され「基金」が誕生。利子を活用すればみんなの負担減になるだろうというお気持ちでした。'85年12月に先生が逝去された後、遺族の方から基金の追加を受けました。それが現在も続いている「内藤基金」なのです。その後先生の奥様を支部の総会にお呼びしたり、東京の各地をご案内したり。その奥様も他界され、今は思い出を語るだけ。さびしい限りです。

支部の活動を2000年まで微力ながら尽力してまいりました。つらいと思うこともなかったのが、性分に合っていたようです。同年秋からは咲耶会(大阪外国語大学同窓会)会長を、野尻庄藏氏(大1)の後を受けて務め、東京と大阪をたえず往復しております。

ご存知のように、母校と大阪大学は'07年10月の統合「統合した新しい“大阪大学”の学生受け入れは'08年4月」と時期を明記して推進する旨の合意を今年3月に取り交わしました。

合意書によりますと「それぞれの特長を活かしつつ、

多彩な教育研究を新たに展開することにより、国際社会のなかで日本の果たすべ

き真の役割を担い得る国際的人材の養成を目指し」統合を推進していくということです。

母校の箕面キャンパスは統合後に「大阪大学外国語学部」になります。日本語を含めた25の言語専攻が当面はそのままそっくり移るわけです。インドネシア語専攻もその中に入り、そこで学んだ学生が卒業後、南十字星会会員になるはずで。これは、ごく自然の流れでもあり、スムーズに進むものと期待されます。

しかし、統合後の全体の同窓会がどうなるかということについて、心配される声やいろいろ意見も聞きます。大阪大学側では昨年7月、同窓会連合会が結成されました。従来の学部ごとの同窓会組織をまとめた形です。両大学でそれぞれ同窓会の活動形態が異なっていたのは事実で、同窓会の再編についても、容易ではないさまざまな問題があります。

われわれは統合後、咲耶会が「大阪大学外国語学部同窓会」として活動を継続できるものと考えております。咲耶会の立場としては、それを受けて円満に新大学の組織に移行していくよう、大学当局への働きかけを今後一層強めるとともに当局との交流を緊密化し、関係各位との調整に全力を尽くすつもりです。

同窓会の将来は、ひとえに会員各位の意志にかかっていると云えます。南十字星会の発展と永続、そして同時に咲耶会の存続に関しまして、今後とも皆様のご協力とご支援をお願いいたします。



キャンパス便り

インドネシア語専攻語 助教授
(外国語学部アジア 講座)

福岡まどか

前期の様子について

昨年度の終わりには、阪大との統合に向けてカリキュラムや制度の改編が学内の教員の間で激しく議論され、そのまま休む間もなく新学期を迎えました。今年度の前期授業期間は、通常通り平和に(?)過ぎ、前期の期末試験を終えるところです。

新しく入学した1回生は23人(うち3人が男子の新入学者)です。さらに今年度はインドネシアに長期で滞在経験のある退職されたばかりの男性が聴講生として

い輪を広げたようです。

模擬店では、マルタバック・ピサン

martabak pisang という、バナナ入りのパンケーキにアイスクリームを添えたものを出しました。私も試食させてもらいましたが、パンケーキの種から自分たちで作ったとのことで、なかなかおいしく食べられました。

当日は雨になってしまったのが残念でしたが、学生たちはTシャツにおそろいのサロンを巻いて、はりきって働いていました。

民族衣装パレードでは孔雀の踊りの衣装やその他の踊りの衣装などを使って、男子学生2人と女子学生3人の5人が、寸劇仕立てのパフォーマンス。残念ながら、賞を獲得することはできなかったのですが、登場した時には衣装に歓声も上がり、パフォーマンスも笑いを誘いつつ盛り上がりを見せ、好評でした。

昼休みや空き時間などを利用して練習に励む学生たちの姿はなかなか頼もしく、微笑ましいです。



専攻語の1回生のすべての授業に積極的に参加してくださり、学生たちにも刺激を与えています。

1回生は、早速、先日7月1日(土)の夏祭りで、模擬店を出したり、民族衣装パレードに出たりして、新し

語劇

昨年度に引き続き今年度も、2回生を中心に間谷祭でインドネシア語による語劇を行います。11月25日(土)午後2時10分~40分の予定です。今年度の台本は、インドネシアの若き脚本家であり、サフィトリ先生のUIの後輩であるユスフ Yoesoef さんに特別に依頼した脚本を予定しています。タイトルは「戦い Perang」という劇で、叙事詩マハーバーラタの大戦争パラタユダの場面設定と人物設定をもとに、争うことの意味、生きることの意味を探求する哲学的な内容のものです。現時点では、数回の授業時間を使って台本をやっと最

後まで読み終えた段階で、

実際の練習や取り組みはこれからというところです。今年の2回生がどこまでこの劇を理解し、演じることができるか。一つの挑戦ではありますが、頑張りたいと思っています。南十字星会からの支援金により、このような本格的な劇を専門家に依頼することが実現できました。ご協力に深く感謝いたしております。



8月にインドネシア旅行した際に、娘たちと空港で

プロフィール

ふくおか・まどか=1987年東京芸術大学音楽学部卒業。92年同大学院音楽研究科修了。98年総合研究大学院大学文化科学研究科修了。国立民族学博物館COE研究員などを経て2004年4月から大阪外国語大学外国語学部アジア講座助教授。

著書に『ジャワの仮面舞踊』『ワヤンの広場 - 東南アジアの人形と仮面』など。

災害支援

このところ自然災害のニュースが多いインドネシアですが、今年5月には中部ジャワのジョグジャカルタで地震が起き、多くの人たちが被害を受けました。外大の専攻語内では、2回生を中心にして積極的な募金活動が行われています。学内のさまざまな場所に募金箱を設置したり、梅田や千里中央などの主要な駅頭で募金を呼びかけたりして、学生たちだけの手でもかなりの額の寄付金を集めつつあります。

最近インドネシアを襲った大地震・津波

2004・12・26	スマトラ島沖	アチェ	M9.3	16万7000人
2005・03・28	スマトラ島沖	ニラス	M8.7	1300人
2006・05・27	ジャワ島中部	ジョグジャカルタ	M6.3	5800人
2006・07・17	ジャワ島西部	パンガンダラン	M7.2	600人

発生、被害地、規模、死者（概数）の順

何人かの学生が、松野先生とともに今年の9月にジョグジャを訪れて、現地の支援団体に寄付金を直接手渡すことになっております。ジョグジャカルタの地震には各方面から支援の呼びかけがありますが、学生たちが自分自身の手で集めた寄付金が現地の復興に役立つことを心から祈ります。

2年前から活動を始めた大阪外大アチェ支援の会の活動も続いています。学生たちは定期的に集まって、アチェの現在の状況についての勉強会や話し合いなどを開いています。前述の夏祭りでは資金稼ぎにクルブックの模擬店も出していました。新入生などのメンバ

外大の今後は?

7月15日(土)には、オープンキャンパスが行われました。専攻語では独自のパンフレットを配布して、専任教員3人と外国人教師のサフィトリ先生と、お手伝いの学生とで取り組みました。インドネシア語への入場者は延べ30人ほどでした。

来年度は後期から阪大として組織が変わることになるため、我々教員も今後の専攻語の状況については、想像し難い面もあります。オープンキャンパスも次はあるかどうかわかりません。同窓会の皆様におかれましては、ご自分の卒業された大学、そして専攻語インドネシア語科のことがやはり最も気になる場所だと存じます。インドネシア語は新生阪大の新外国語学部の一つの専攻



学生たちが取り組んだジャワ地震被災支援の募金活動。6月、大阪駅前

一も増え、積極的に活動しているようです。彼らも9月には松野先生と現地を訪れる予定だとのこと。

7月には、ジャワ南部のパンガンダランで津波災害が起きました。自然の猛威に際して、人間は何ができるのだろうかと考えさせられるとともに、インドネシアの各地の復興を心から祈りたいと思います。

大阪外大アチェ支援学生の会（OGASA）メンバーはインドネシア語専攻はじめ他言語専攻を含めて22人。gaidai_aceh@yahoo.co.jpで活動状況を報告。OGASAをサポートする会費なしのグループとしてCoGASA（コガサ）も結成している。

言語として残るこ

とになりますが、今後の成り行きについては正直申し上げまして、我々教員も明確なイメージを持つのが難しいのです。

統合の状況について、また機会があればお伝えしたいと思います。このような現状ではありますが、われわれ教員も、学生たちがインドネシアに関する興味や知識を広げていってくれることを願いながら、毎日の授業に取り組んでおります。

これからもいろいろな面でのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

寄稿

Apa & siapa

南十字星は不滅

板坂勇夫 (47卒 専23)



東京で7月1日に開かれた南十字星関東支部懇親会に出席した。当日出席者の中で私が最年長。乾盃の音頭とりを仰せつかった。「80歳というのはいや年寄りか」と自覚させられた。

会合で松野明久教授から大阪外語大の現況について詳しいお話を承ったが、「時代の移り変わり」がぐんと胸に来る。阪大との統合については、大学当局の皆さんの大変なご苦労があっただろうが、結果としては「悲しい吸収合併」といった淋しい思いから抜け出せなかった。大阪外語の特長と伝統がどこまで大阪大学外国語学部に継承されるか、疑問を感じるからである。

南十字星会の磯田良一さんが会長を務めておられる咲耶会は、阪大との統合後も旧大外の同窓会として存続させようと会長以下が頑張っておられるが、並大抵の苦労

ではないと思う。

それに比べれば南十字星会は問題ないだろう。外語大の特色である語部のタテの繋がりは連綿として不滅のものと言えよう。特に山口寛さんが会長を継がれてから創刊されたこの会報「南十字星」は、全会員をしっかりと結びつける絶好の媒体であり、これから何年も何十年も続くものと信じている。



ここで恐縮であるが、私事にわたる話を少し。

1947年(昭和22年)に卒業した私の外語生活は、思えば貧弱なものであった。次第に苛烈となる戦局の中で、3年間の大半は勤労働員で名古屋の航空機工場で働かれ、召集されて軍隊に入り、まともな学習は1年生の時だけ。それでも内藤春三先生とイスマイル・ナジール先生の気合の入った授業は、今なお忘れ難い貴重なものであった。終戦後、陸軍予備士官学校から復員して復学したものの、空腹をかかえて食糧探しに走り回る毎日、ほとんど通学しないまま卒業させられた。卒業しても即

失業。求人など1件も無く、仲間の大半は帰郷して中学校の英語教師を勤めるほかなかった。

私は先輩につてを求め幸いにも、石原産業にもぐり込み入社することが出来た。そ

して、この会社が設立に漕ぎつけたジャカルタのプルダニア銀行の第1陣派遣者に加えられて、1957年にKLMのプロペラ機でクマヨラン空港に降り立った。それが35年にわたる私のインドネシア生活のスタートであった。

その後、石原産業がプルダニア銀行の経営を大和銀行に委ねたことから、私はプ銀勤務を続けたまま大和銀行に転籍させられた。そして大和銀行を定年退職した1982年に東大阪市の明和グラビア化学の現地法人(プラスチック工場)での勤務を開始し、10年間勤め上げてインドネシア勤務に終止符を打った。1992年に帰国したが、間もなく財団法人日本インドネシア協会に請われて同協会の事務局顧問としてインドネシアの政治・経済・社会の調査・研究に従事している。仕事の大半は新聞などの翻訳であるが、これが結構楽しい仕事で飽きることがない。おかげで頭がさほどぼけていないようである。

以上申し述べた私のキャリアなど何の役にも立たないムダ話であるが、ここで私が言いたいのは、特に在学中の諸君には「インドネシア語を真剣に学んでほしい」ということである。インドネシア語は実に有用な言語であり、日本人にとっては奥義を究めやすい言語である。

私の知っている限りは、インドネシアで勤務していた大外出身の諸君のインドネシア語は、すべて見事なものであった。大使館勤務の故増井正さん('56卒)のインドネシア語はスカルノ大統領が舌を巻くほどだった。私が勧めたいインドネシア語上達法は、まず新聞を毎日読むことである。新聞用語は最も正当な国語が使われている。これに勝る教材はない。

外語に入学した限りは、その専攻外国語をマスターするのが最優先である。文化、風俗に興味を持って学ぶことも重要であるが、そちらに重点を置くのは本末転倒であり、まずインドネシア語を学ばなければならない。

寄稿

Apa & siapa

イスラム教と出産

中田 梢 ('03卒 大51)

私の主人はインドネシア人です。現在1歳になる娘が1人います。結婚と同時に私はイスラム教に改宗し、娘も生まれながらのイスラム教です。

子供をインドネシアで産むか、日本で産むか大変迷いました。インドネシアでの乳児死亡率は日本の50倍とか。日本で出産すれば、市からの出産一時給付金などがあってかなり安く、かつ質の高い医療が受けられます。あれこれ考え結局、日本での出産を決意しました。でも、イスラム教がまだまだ珍しい地方のこと。出産に際しイスラム教にまつわるいろいろなことがありました。

予定日を3日後に控え、お腹の張りが頻繁になってきたので主人とともに病院へ向かい、そのまま私は分娩室へ。そしてまもなく陣痛が始まり、痛みも激しくなってきました。主人は戸惑うばかり。助産師さんが「ご主人、背中をさすってあげて下さい」などいうのですが、日本語が全くわからない主人はなのおオオ口。私はうめきながらも主人にインドネシア語で通訳していました。

分娩室に入って6時間後、無事女の子を出産。その時に第1の事件が起きました。産声を上げたばかりの赤ちゃんを医師が抱いて私の胸に。すると、主人は赤ちゃんの耳元で突然お祈りをささやき始めました。洗礼をし、アッラーに感謝の意を述べるのはイスラム教では父親の役目。それがまた長いのです。

その光景に今度は医師が戸惑い、まだ処置があるからと赤ちゃんを戻すよう言うのですが、日本語が通じない。

主人はお祈りを続け、私は通訳する気力も残っておらず、そのやりとりを見て見ないふりをしていました。

産後退院まで主人も一緒に病室で寝泊り出来るようあらかじめ病院に頼んでいました。日本語を話せず、日本に来てまだ1週間の主人を、イスラム教に接したことのない私の両親に預けるの



娘が誕生して間もない頃撮影した三人の記念写真

は少し無理があると思ったからです。私の食事は病院から出るのでもいいのですが、主人のご飯は前にあるスーパーでお惣菜を買ってくるほかありません。私は主人に豚に関連する食べ物の名前を思い浮かぶだけメモに書き「これが表示されているものは豚が使われているから」と言って主人に渡しました。漢字、かたかな、ひらがなで「かつ・カツ・豚・ぶた・ブタ・ベーコン・ハム」と。そんな用意周到にもかかわらず、主人は餃子、春巻きなど、表示には「豚」の文字はないのですが不意について見事に豚を使っているものを買ってきたのです。

それからが第2の事件です。私は見るに見かねて病院のパジャマを着替え、看護婦に気付かれないよう病院を抜け出し、主人がご飯を買うのに付き添いました。歩くと下半部に痛みがある私は明らかに歩きがおかしく、いろいろな人にじろじろ見られていました。そして、腕には出産直後で入院中を示すピンクの輪をはめたまま。5回目の「脱走」の時、受付の人に見つかり、笑って「駄目じゃないですか」と注意されました。

娘を抱いて病院から帰ると、たくさんの方からお祝いの品を頂きました。そして第3の事件です。お祝いの中にはブタのプリントのよだれかけや、タオル、おもちゃがあり、「絶対に使うなよ」と主人。でも、これがとてもかわいい。赤ちゃんの関連商品にはなぜか、うさぎ、ブタのプリントが多いです。私は主人の言葉通り使わずしまっておいたのですが、両親が出してきて娘に使う。主人は慌てて取る。そんなやり取りが何度か。主人が1人で先にインドネシアへ帰ってから両親はまたそれらを出して娘に着けていましたが...

出産を通し改めて「私はイスラム教なんだ」と感じました。6月末に娘を連れインドネシアへ。今年の断食は私には初めて。やり通せるか、少し心配です。



結婚式はインドネシアで

日本人十五万人が戦病死したパプアニューギニア。戦没者慰霊碑が数多く建てられている。その一つの碑前で



大阪外大に感謝

卒業後 40 年間の外務省勤めでしたが、在パプアニューギニア大使を最後に 05 年 12 月定年退職しました。我が人生の大半を占めることになった外交官生活へ道筋をつけてくれた外大インドネシア語学科に、今更ながら感謝の念で一杯です。実際一番関係の深かった外国はインドネシア語・マレーシア語を母国語とするインドネシアとマレーシアでした。両国にはジャカルタ、バリ、マカッサル(ウジュンパンダン)、クアラルンプールの各地に延べ 18 年の駐在、東京での勤務期間中も延べ 13 年間に両国との外交関係の担当に費やしました。

有意義な人生とは「好きなことを仕事にし、そこから収入を得て、その仕事に社会からそれなりの評価を受けること」という言い方があります。最後の部分とはともかく、前二項目についてはお陰様である程度達成できたのではと自己満足している今日この頃です。

長い外交官生活で常に頭から離れなかったのは、我が愛する日本が軍事力を使うことなく世界中の多くの国から尊敬され、支持され、国際社会の名誉ある地位を獲得するには何が必要かということでした。

後輩諸君が輝かしい将来のために、外大を誇りに思い、キャンパスライフをエンジョイしつつ切磋琢磨されることを心から願っています。将来を考えられる上で、この拙文が何らかのご参考になれば幸いです。

マレーシア、インドネシア勤務

最初の勤務地は 66 年から 4 年間のマレーシアでした。当時は独立間もなく(57 年独立)マラヤ連邦からマレーシアへと国名変更されたばかりで、まだ旧宗主国英国の影響力が強く残っている時期でした。初めての外国暮らしだったこともあり、外国から戦後の日本がどのように見られているのか非常に気になったことを覚えています。前大戦の影響がまだ残っている時期で、マレー系国民やインド系国民は総じて日本に対して友

寄稿

Apa & siapa

「2666 年」

前パプアニューギニア日本大使

山下 勝男 ('66 卒、大 14)

好的な感じでしたが、中国系国民や在住の英国人の日本に対する感情には厳しいものがありました。その後、81 年からマハティール首相の提唱した「ルックイースト政策」の下で両国間の交流が格段に緊密化、友好関係が深まりを見せていることは喜ばしい限りです。

一方、インドネシアでの最初の勤務は 30 年前の 75 年でした。インドネシアは伝統的に日本に友好的な国ですが、当時は、スカルノ体制の崩壊した 65 年以降のスハルト大統領による開放政策の下で日本企業の投資が急激に増加し、これが国内の貧富の差の拡大や政治家・軍人の汚職の蔓延と関連づけられ、国民の不満が反日暴動(74 年 1 月)に発展するような反日感情が高まった時期でした。日本企業や在住の日本人の方々からは「日本が大量の経済援助をしているのに反日とは」「日本政府は何をしているのか」とお叱りを受けているような状況でした。その後ハビビ、ラーマン、メガワティおよび現在のユドヨノと政権は慌しく交代したものの日本との関係は益々緊密になり、かつ友好的に発展していることはご承知の通りです。

両国との関係は政府レベルの関係だけでなく、国民レベルの相互理解に基づく友好関係に発展しつつあるように感じます。30~40 年前とは隔世の感があります。今後とも両国国民と日本人相互の努力により、対等で成熟した友好関係が築けることを願うばかりです。

尊敬される国

外国との間で良好な関係を維持し、相手国から日本を支援してもらうためにはどうしたらいいか。日本の本当の姿を理解してもらい、尊敬される国になる以外方法はありません。鈍感な自分にとって、この答えに到達するのに実に 60 年余りを要しました。

ただ実際のところ、日本の姿を正しく外国に理解してもらうことは容易なことではありません。今の日本に先の戦争の過ちを反省こそすれ、再び軍事力を大增

寄稿

Apa & siapa

強し外国を武力で侵略しようと思っている人が何人いるのでしょうか。外国の一部の国では、日本は先の戦争の反省もせず、また軍国主義の道を進んでいると言い張って、それを学校で教育している例もあるようです。反日感情を煽って自国に対する愛国心高揚を狙っているのかもしれませんが、悲しく残念なことです。

相手を正しく理解し、尊敬の念を抱く行為は双方向的なもので、相手に誤解され、尊敬されないのは日本自身の側にも責任があるのでしょうか。世界中のいかなる国も、自分の国に誇りを持たない国はありません。自国に誇りを持たない国は外国から決して尊敬されないと言うことです。最近の日本では、国際化、グローバル化の履き違えと思われるような政策がとられ、世論もそのように誘導されて、その結果、国として自信や誇りをなくすような雰囲気が強まっているのでは...と危惧している次第です。あらゆる国が、自国の国づくりに励み、国民に誇りを持たせる教育に尽力しています。日本は謙虚であるが自信を持ち、傲慢ではなく自国に誇りを持てるような教育・国づくりに努めたいものです。

バリ島の魅力

最後にタイトルの「2666年」です。この数字はズバリ、今年の西暦2006年、平成18年に相当する紀元年です。いまどき、紀元年を記憶している方は少ないでしょう。日本



06年3月バリで

のカレンダーにも記載されていません。しかし、私もかつて勤務したことのあるインドネシアのバリ島の「バリ・ヒンズー暦カレンダー」には現在も西暦、イスラム暦、仏教暦の年号とともに日本の紀元年が毎年記載されているのです。

バリ島は70年代以降観光開発に力を入れ、島民約300万人のところに年間外国からの観光客が100万人を超える一大国際観光都市として有名になりました。小さな島に、外国人が1年中溢れている感じです。島民の殆どが直接間接的に外国人と接する機会の多い生活をしており、島の経済の半分以上が観光業に頼って



パプアニューギニアの村人たちと。日本の援助で建設される学校や医療施設の完成式では、こんな大歓迎を受ける

いると言っても過言ではないでしょう。でもバリ島のすごいところは、外部から影響を受けやすい環境に晒されているながら、古くからの伝統、宗教、文化を日常生活の中で頑なに守り実行していることです。特にバリ・ヒンズー教の教え（神と自然と人間の調和を大切に）は島民の心の隅々まで深くしみこんでいます。

一つの例が、観光客の増加に対処するため高層ホテル建設の需要が非常に高いにもかかわらず、自然環境を保護するため椰子の木より高いビル(4階建て相当)の建設は許可しない政策をとっています。また、毎年「ニュピ」と言われるヒンズー暦の正月(今年は3月30日)は島民の「静寂の日」であり、24時間「火」や「明かり」の使用、戸外での活動は禁止されています。バリの空港は航空機の離着陸は一切認められず、島内の交通は全てストップ、レストランも営業禁止です。

唯一の例外は、観光客のためにホテル内でのプール遊びなどの活動、室内での飲食は「明かり」が外部に漏れないように配慮した上で許されているだけです。この習慣は観光客や観光業界からは不評であり、バリ島にとっても経済的に大きな損失となることは明らかですが、宗教上の掟を頑なに守り通しています。

私の言いたかったのは、数多くの外国観光客を受け入れたり、遠い日本の元号を日常使われる伝統的な暦に記載するなど外に開かれた姿勢も持ちながらも、自分の文化、伝統、宗教を誇りにし大切に守り育てているバリの人々に感銘を受けたということです。

我々も、外国のことを勉強し、理解に努め、その優れたところを尊重できるような広い心を持ちながら、同時に自らの歴史、伝統、文化、宗教、自然を理解し、過去の過ちは反省しつつも優れた点は自らの誇りとして後世に伝え、外国にも理解され尊敬される国になるように一緒に努力したいものです。

バンドン発

この街と自然の魅力

大田中 実 ('63卒 大11)

バンドンはジャカルタから東南約 150 ㎞、海拔 750 ㍎の盆地にある。インドネシア 4 番目の都市で、西部ジャワ州の州都でもある。私の住む DagoPakar(海拔 800 ㍎)からは、ランプの明かりが残ったバンドンの街が朝日を受け、もやの中に透けて見える。雨季は特に空気が澄んでいる。時には、雲が山の中腹までさがって山の稜線を浮かび上がらせる。遠方には Papan Dayan 火山からゆっくり立ち上る噴煙。水墨画のような幻想的光景が、毎日姿を変えて現れる。郊外に出れば、見渡す限りえんえんと続く茶畑や野菜畑。

こういった景色を見るのが好きだ。すがすがしい気持ちになる。

平均気温 27 度。熱帯としては涼しく、朝方は 20 度前後となる。公害が少ない。勉強にも適しているのであろう。スカルノ初代大統領も学んだバンドン工科大学(通称 ITB、1920 年設立)は世界的に知られている。日本との関係も深い Pajajaran 大学など有名な大学や専門学校には、各地から優秀な学生が集まる。政府の

週末一変

バンドンとジャカルタ間は、以前は汽車が一番早く約 3 時間だった。最近は高速道路が整備され、車なら 1 時間半から 2 時間。首都が一層近くなった。週末ともなると街中はジャカルタナンバ - の車であふれかえり、あちこちで交通渋滞もしばしば。しかし、そんなことはお構いなし。毎週々々ジャカルタから人はやって来る。

狙いは Factory Outlet のブランド物(ちょっと怪しい)や比較的安い衣料品を買い求めることらしい。この地は昔から“繊維のまち”なのだ。ちなみに、ゴルフ用のスポ - ツシャツやズボンは 500 - 1000 円で買える。

週末、どこのホテルも満員になる。部屋代やレストランでの食事代も徐々に上がってきた。私どもバンドンの住人にとっては、いささか迷惑な話ではある。



竹楽器の演奏

Jaipongan や Dandut など伝統的な歌や踊りが盛んである。観光客や修学旅行生で賑わう Saung Angklung Udjo 劇場では、スダの伝統的舞踊とも言われる子供たちによる Angklung Bambu Show が毎日開かれている。フィナ - レは、指揮者の合図に合わせて観客が一緒になって同じ竹楽器を演奏。大いに盛り上がる。私も何度か試してみたが、なかなか楽しいものである。(写真㊦と㊧)

また、おいしい料理が食べられるのもバンドン。パダン料理は Gule Kambing や Ayam Pop、ジャワ料理なら Soto Babat Daging、スダ料理では Sop Buntut...。いつ食べてもおいしいし、決して飽きが来ない。いずれも今や全国区の料理になっている。

バンドンは、第二次世界大戦後の 1955 年にアジア・アフリカ会議が開かれたことでも有名だ。独立記念館には当時の写真や文献が展示されている。昨年、その 50 周年記念式典が、日本の小泉首相はじめ各国首脳を



研究機関も多い。

私がバンドンに赴任したのは 1977 年 3 月だった。勤務しているのは電機部品・電線製造の会社。赴任時、工場の周りには田んぼでアヒルが泳いでいた。今は他社の工場がまわりを囲んでいる。経済発展とともに仕事も増えた。従業員数は当時わずか 100 人ほどだった。現在は 2000 人を超える。

大勢招待して盛大に行われたのは記憶に新しい。

オランダ時代の建物がいまだに多く残っている。その代表的なものがアジア・アフリカ通りにある。1880年頃建築された Savoy Homann Hotel だ。近年改装さ

サ
ボ
イ
・
ホ
ー
マ
ン
・
ホ
テ
ル



れたが、オランダ時代の面影が漂い、オランダ人観光客はこのホテルをよく利用している。

かつて Kota Kembang といわれただけあって、多くの公園には年中美しい花が咲く。オランダ時代“ジャワのパリ”とも呼ばれ、オランダ植民地政府が首都機能を本気でこの地に移そうとしたことがあったという。

伝説の山

バンドン北部郊外には、マリバヤ公園や伝説で有名な Tangkuban Prahú 火山(写真⑤)や Ciater 温泉があり、車で簡単に行ける。

Tangkuban Prahú は、バンドンの北 28 ㎞に位置する海拔 2076 ㍎の火山である。多くの人々が訪れるこの山は、以前は頂上まで車で行けたが、今は途中からミニバスに乗らされる。これも地元の人々に職を与えるためだろう。遠くから見ると山全体が船をひっくり返したような(船底が天を向く)形をしている。

この山の伝説を、簡単に紹介しよう -。

母親と長い間別れていた実の息子の若い王子が、知らずに自分に結婚を申し込む。母親は断るために「夜が明けるまでにダムを作り、大きな船を作って浮かべよ」と難題を吹っかける。ところが、船は完成しそうになる。あわてた母親は神様をお願いして、太陽を早く昇らせ、一番鳥を早く鳴かせた。若者はだまされた

と激怒し、完成しかけている船を蹴飛ばしひっくり返してしまった。それが今の山(Tangkuban Prahú)になった。この伝説は昨年、外大の語劇祭に「Dayang Sumbi」のタイトルで演じられた

その Tangkuban Prahú のふもとと海拔 1500 ㍎の地点には、広大な茶畑や丁子畑に囲まれた Ciater という温泉がある。湯量は多く、皮膚病やリュウマチによく効くとのこと。ここも、私の“お気に入り”。いつも足だけつかう。保養地として結構いい線を行く。

純朴で人なつっこい

バンドンの住民の大多数はスダ人である。耳にするのも、スダ語が多い。スダの伝統や文化を学ぶのには、やはり最も適した土地と言える。

基本的にはインドネシアはどこへ行っても雰囲気は大差ないが、バンドンに住んでいる人は何となく純朴で、人なつっこい。外国人を大事にしてくれる。風俗・文化・習慣の面でまだ単一性が保たれ、人々がすていないようだ。ジャカルタのような華やかさはないが、昼間はもちろん、夜も安心して外出できる。今はランク付けがあるのかどうか、以前は世界で最も安全な 10 都市のひとつに数えられていた。



楽天的で宵越しの金は持たない。くよくよしない。旦那に逃げられても探しまわらない。旦那は Adu Domba など賭け事に熱中する。楽しんで儲けたい。まずいことはなんでも Apa Boleh Buat と諦めが早い。

こうした気質を理解しすべてを飲み込んだ上で仕事をしないと、トラブルの連続でストレスがたまり病気になる。ここに長くいられるということは、既に悟りの境地を開いたか、半分スダ人になったか、それともストレスをためない方法を自然に身に付けたか。自分にもよく分からない。

欲張ってあれこれ書き、観光ガイド的になってしまった。だが、ともかくバンドンには、昔の名残があり、アカデミックな雰囲気が漂う。インドネシアの他の都市には見られない、魅力溢れる街である。一度長期滞在を考えてみられては如何だろう。

寄稿

Apa & siapa

タナ・トラジャへの旅日記

石黒 絢子 ('06卒 大54)

どうしても授業で習ったスラウェシ島のトンコナンとトラジャのお葬式を見たくて、今年春の卒業旅行でタナ・トラジャまで足をのばしました。卒業旅行に普通お葬式なんか見に行かないだろうって、自分で突っ込みながらすごく楽しみでした。マカッサルからバスで約10時間。この国独特の荒っぽい運転で山道を走りました。

何とか夜には目的地に到着。トラジャ観光のシーズンオフだったため、目星をつけていた割ときれいなバックパッカー用の宿に泊まることができました。部屋に入ってビックリ。何とトイレのドアがない!! 今まで泊まった宿とは違う強烈な印象を受けました。でも、こんなものありかと思って荷物をほどこきました。

その夜、宿の主がウェルカムドリンクを作ってくれました。飲んでみると、主の息子が出てきました。なぜか日本語の名前です。奥さんの妊娠中に、泊まった日本人がお腹を見て「男の子だ。」「男の子ならあなたの名前を付けます」とやりとり。そして、生まれたのが男の子。約束通りその人の名前をつけたそうです。何とも適当というか、約束を固く守ったというか...。こんな遠くで“日本”を感じました。

目当てのお葬式は、運よく見ることができました。大きなお葬式ではないということだったのに、迫力はたっぷり。水牛9頭と豚3頭が生贄に。屠殺シーンに悲鳴をあげることもなく、意外にもまじまじ見入ってしまいました。周りのインドネシア人たちはハイテンションではやしたて。儀式自体は周辺が色鮮やかに飾られ、多くの人でにぎわい、まさにお祭りでした。



舟形の屋根をした高床式の住宅トンコナンの前でパンザイ。

⑤は葬式で生贄を運ぶ行列



この儀式のために、生贄の宗教であるキリスト教の古いやり方を取り入れて代々継承しているというのです。儀式を通じて独特な雰囲気を持つトラジャの文化を肌で感じることができ、とても心に残る旅でした。



パンザイ

奉納

バリの仮面舞踊。でも、舞台は大阪・曽根崎の「お初天神」。7月22日夕の夏祭りの1コマです。

南十字星会の田中千晶さん(大38)らが境内で奉納しました。今年で11回目。田中さんはこの近くで生まれ育ったそうです。ガムラン演奏のみなさんも汗だく。神に捧げる音楽と踊り。日本の祭りにも不思議にぴったり合って、違和感がありませんでした。

消息・ひとこと

池永義啓(専18)=札幌市

遅い春を待ち侘びる北国のものにとっては、南の国の便りは心むむしい。感謝。

藤原 剛(専18)=東京都港区

外語3年の2学期から外国郵便の検閲をやらされたことは、あまり知られていません。私は外国郵便局で、主としてオランダ語を読んでおりました。

長谷川元良(専25)=兵庫県加古川市

専25期生が加藤利雄兄と小生だけでは淋しい。他の諸兄の協賛金をお願いします。

原 勝利(専26)=千葉県佐倉市

81歳になっていますが、相変わらず大元気で。

小原義男(大1)=名古屋

生涯学習で週1回当地インドネシア人に時事問題、現地新聞のレッスンを受けています。また、尺八道家として常時、演奏会、後進指導に専念する毎日です。

野尻庄蔵(大1)=大阪市天王寺区

益々若い力を結集され、さらに発展されますよう。

岡田 弘(大4)=大阪市住吉区

第2号で同期の西村君の寄稿を読んで、懐かしかったです。現在、証券会社にいます。よろしく。

植田 喬(大6)=奈良県御所市

トシですね。体調は年々弱っています。

西田達雄(大8)=東京都調布市

後輩の皆様が各地各分野でご活躍されているのを知ってうれしく、心からご健闘を祈っております。板坂先輩とともに(財)日本・インドネシア協会活動に。日伊の交流が幅広く深まることを願っております。

林 喜久雄(大8)=静岡県沼津市

昨年6月、ジャスダック証券取引所に上場した株ZOAの常務取締役。人生の第4コーナーを回って(69歳)なお現役で頑張り、かつenjoyしております。

石川恵二(大10)=横浜市

南十字星会の沿革、第2号の野尻庄蔵さんのご説明でよく分かりました。ありがとうございました。

高野郁男(大10)=横浜市

会報は多種多様で読ませる。写真も鮮明。海外・関東の記事が多ければなおよい。

小杉 功(大12)=静岡市

インドネシアには1979年9月から1985年1月まで5年5か月駐在し、充実した日々を送りました。

瀬戸宏康(大12)=奈良県生駒市

家でんびりしています。06年1月から3月まで寒さのぎに、沖縄へ行っていました。

辻 修司(大12)=留守宅・京都市東山区

現在もジャカルタ駐在。1991年から15年間。今夏6日間、1年ぶりに一時帰国しました。

井上久生(大14)=奈良市

8月15日のNHK生放送・終戦記念日特集『もう一度話そう アジアの中の日本』に視聴者代

消息・ひとこと

表の1人として参加。「靖国」「北朝鮮」の問題を通して歴史認識・安全保障の勉強できたのが最大の収穫でした。

朝倉俊雄(大15)=横浜市

卒業して39年。1度キャンパスを訪ねようと思っています。

長尾善伸(大18)=東京都練馬区

昨年、定年退職し、舌と咽喉ガンの手術を受けて目下、発音と飲食のリハビリ中。完治したら、ジャカルタ・ボルネオを再訪する予定です。

野崎淳一(大19)=名古屋市

全国に700万人いる団塊の世代。来年、定年を迎えます。

竹前望美(大42)=新潟県新発田市

関西を離れ、会報に懐かしさが募る。次号が楽しみです。

懐かしい仲間 '64卒 大12期生



8月8日、大阪・北区の料理店で。「大阪近郊で都合のつく者同士でとりあえず昼飯会で...」呼びかけは藤野。小西、小川、本城、渡辺、岩谷の6人が集まった。卒業以来42年ぶりの顔合わせ。海外勤務組が多くて「世話役不在だったものなあ。言い訳は別にして「これからは、ちょくちょく会おうよ」

おくやみ申し上げます

森木田圭三(専7)=大津市 18年5月13日死去。

渡部喜三(専11)=松山市

妻・恵さんから=18年2月18日、喜三永眠致しました

松本 登(専20)=奈良市

妻・艶子さん=3月27日夕、病に勝てず1人で黄泉の国に旅立ちました。弔電ありがとうございました。深く感謝申し上げます。生前、お酒が入ると、ブンガワンソロを原語で聞かせてくれたことにもございます。終戦後、シンガポールからの引揚船で全員船酔いしたのに、自分はケロッとしていたとよく自慢していましたが...

増谷 豊(専23)=兵庫県西宮市

妻・庸子さん=17年10月17日、豊は他界致しました

椿井捷信(大16)=愛知県扶桑町

妻・京さん=人生の花開いた60歳の9月26日、肺がんでアツと言う間に人生を終えました。皆様のご多幸をお祈りし、故人になりかわりお礼申し上げます

投稿のお願い

「南十字星」の第4号は来年4月に刊行の予定です。投稿をお待ちしています。テーマ自由。原稿の長さはメールならA4で1枚分1200字程度。岩谷英志あて(rocky3@wombat.zaqa.ne.jp)。住所 〒563-0029 大阪府池田市五月丘2-5-113-402 (Tel 072-753-1693)。カラー写真添付を。